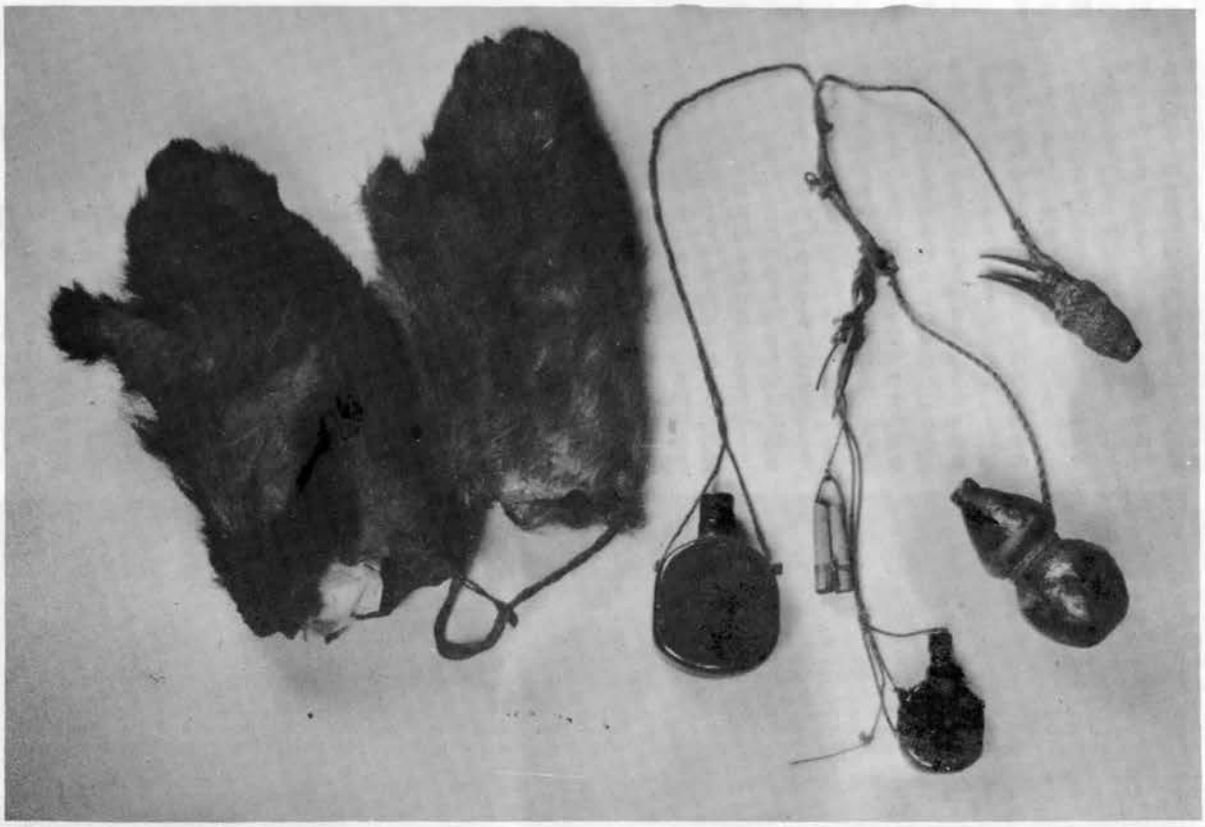
山と博物館

第17巻　第8号　1972年8月25日　大町山岳博物館



―遠山品右衛門遺品―　右：カモシカの毛皮で作った手袋、左：散弾・火薬などを入れた狩猟用小物入れ（肩かけ）　大町山岳博物館所蔵

山博の全面改築を

前庭にいつしか育ったひとかたまりの白樺の樹々、その枝も高くのびて黄ばみはじめた葉がかすかにゆらいでいる。そんな眺めのある博物館の窓辺にも、半世紀と四分の一という永い風雪を経て刻みこまれた年輪はかくし切れずに、深い板目の溝には色あせたペンキがあちこちと剝げ落ちて見える。それは明治の三十四年から五十数年の間を旧大町南高の校舎として、また昭和三十二年から現在までの十五年間をこの博物館として堪えてきた年老いた建物のプロフイルである。

古びて地味なたたずまいは、いづこの博物館にも共通するものだが、それかあらぬか、やれ非生産的だの、厄介ものだのと悪口をたたかれた時もあった。しかし先達者たちの洞察した目的はようやく叶えられようとしている。それは営々として築きあげられてきた研究の内容や事業の成果が、今日の荒廃した環境や情緒不安定な社会において、不可欠な要素として注目されてきたからであり、それが生態学であり、環境科学などである。

日を追って増大する来館者が学生から一般、旅行者から観光客までと質的変化をも惹き起しているのを見ても、その価値の一端をうかがい知ることは容易である。しかしながら現在、老朽化した部屋や保存庫につみ重ねられはみ出している膨大な記録や、不完全な展示ケースにおさまっている貴重な資料など見るにつけ、施設の不満を痛切に感ぜざるを得ないのである。

一日も早く、訪れる人々のため、より快適で、より効果的な形でこれらの資料が提供され伝達されるよう整備、拡充を急ぎ、ふるさとのまちともども一層の発展をさせたいものである。白樺の枝にもやがて新しい芽吹の季節がめぐって来るであろう、その頃にはこの博物館の全面改築の話がもち上っていることを願うや切である。

（山本携峯）

山のガイドたち

高須茂

双六から笠へ出て、槍見で一泊、翌日、中尾峠を越えて上高地へ出ようとした。三年ばかり前の七月である。同行は詩人の鳥見迅彦――そのとき中尾の部落で**中畠政太郎**とあった。ほとんど二十年ぶりの対面だった。雑貨屋の店さきで、筧の水につけてあったビールをぬき、一時間ばかり話してわかれたが、山刀を腰にさげて、地下足袋で、昔ながらの姿をしていた。さすがにもう背負えませんねと言っていた。なあに荷さえなけりゃ、まだ大丈夫ですと、奥又白に中畠新道を作ったころの意気を見せていたが、翌年の二月、もう彼はこの世にいなかった。

上高地の**内野常次郎**が死んだのは、もっと前だったし、**上条親人**は岳沢ヒュッテを建てた翌年になくなった。

私は山でガイドを雇ったことはない。

サン・ギードだとか、フューラーローゼだとかいう主義を信奉しているわけではないが夏山ではその必要を感じなかったし、冬山ではポーターで足りた。

登山家とガイドとの友情などというのは、すでに私の前の時代で終っていたのである。しかし、それでもいろいろな機会に、当時名うてのガイドたちとは、よく顔をあわせている。

馬場島の剣の家で停滞していたとき、前年地獄谷で死んだ筈の**佐伯宗作**にぶつかってギョッとしたことがある。いっしょにいた高梨信重までが、やはり一瞬息をのんだが、何とそれは兄の**栄作**だった。二階で布団から首を出して、タバコを吸いながら駄弁っていたとき、トントンと階段をあがって来て顔だけ出したので、いっそうびっくりしたのだが。

日本の山のガイドとして、ヨーロッパのそれにひけをとらないだけの教養と技術と気概をもっていたのは、おそらく芦峅の**佐伯宗作**だったろう。昭和十年、彼が京大の白頭山遠征に、**大和由松**とともに参加したのは、全隊員の推選によるものだったが、――今日、ヒマラヤ遠征に参加できるガイドというのは、この国にはおそらく見あたるまい。

大和由松とはしばらくあわない。戦前の正月だった。大晦日に上高地入りをしたが、途中、中ノ湯で**上条孫人**とあい、大晦日だし、まあ一杯やりましょうというので、それが夜明けまでつきあうことになり、――元日の昼すぎ中ノ湯発、釜トンネルの氷でなんべんもころびながら、とにかくホテルの**木村殖**のところまで辿りつくと、ここに彼がいた。**内野常次郎**や、**平林次男**らもいた。そこへ孫人があとから加わったのだからたまらない。出されたヤカンを茶のつもりで飯にかけたら、それが酒だった。

暮さや長さもいたろう。元日だじ、というわけで、この豪傑たちにひっぱりこまれたから、とうとうまた夜明かしになり、盛んな安曇節の合唱をきりぬけながら、這うようにして寝床へ逃げこんだのを覚えている。――加藤泰三の『霧の山稜』に、この正月の上高地のことがちょっと出ている。

昭和二年の夏、秩父宮が槍から双六、笠へ縦走したとき、ガイドとして選ばれたのは、**大和由松　中畠政太郎　内野常次郎　今田重太郎**の四人だったと思うが、今田はちかごろは穂高岳山荘の経営でいそがしいらしい。

常さんはいろいろな逸話をもっているが、秩父宮が　津子妃と上高地に遊ばれたとき大正池で岩魚を釣っていた彼が、「こんどはオカミサンとご一緒で」と挨拶した話は有名である。

晩年は釣りをやめて、梓川畔のちいさな小屋で暮らしていたが、戦後まもなく、木村殖と二人で日本ニュースに撮ってもらったことがある。糸に小石を結んで岩魚釣りの格好だけしてもらえばよかったのだから、小屋の裏でいいというのに、ここには岩魚はいねえじ、常はあんなところで釣っているといわれちゃ恥だからと、わざわざ小梨平のシュラダシ沢出合までかけたりしたことがあった。

ウエストンを案内する嘉門治（左）

上条嘉門治

大和と中畠が、積雪期の槍ー穂高縦走を、立教と学習院にわかれて争ったのは、たしか昭和七年の一月だったろう。おそらく日本の山のガイドというものの質が、もっともよかったのはこのころであろう。すくなくとも彼らはアルピニズムの何たるかを理解していた。

日本の山のガイドとして、この国のアルピニズムの歴史の上に、最初に名をあらわすのは、**中島市右衛門**であり、**上条嘉門治**であろう。前者は中尾の、後者は島々の、ともに猟師であり、ウオルター・ウエストンを笠ケ岳や穂高岳へ案内しているのだが、日本山岳会結成当時、小島烏水は『山岳』の第一年第二号（一九二六年六月）に〝登山の導者養成に就きて〟というエッセイを書いているが、「日本の山登りで、何が不自由といって、おそらく案内者の無知、無能、怠惰ほどいけぬものはあるまい。大抵の登山家で口論をしたり、叱言の一つも言わないものは無かろうと推せられる。『山岳』第一号所載の登山紀行を読んでも、案内者に対する苦情が大分出ている。日本の山

案内は簡単なる荷担ぎである。決して*Guide*と呼ぶことはできない。その甚だしきに至ると、客が留まろうというのに帰ろうというし客が困難しているのを傍観して、自分勝手な行動をとっている。ほとんど雇われているのか、恩恵的に同道しているのか区別がつかないのがある」といっている。

立山や富士の山麓には、中御（ちゅうご）とか強力（ごうりき）とかいうガイド兼ポーターがいたが、他の山では猟師か樵夫のほか、山の案内をできる者がいなかったのである。

志村鳥嶺が白馬岳に登ったときは、官林の見まわりをしていた細野の**丸山定吉**のむすこたちを連れている。―いわゆる参謀本部の地図（五万分一地形図）製作のための測量班の人夫をつとめた者が、あとで一時的に山のガイドをやっていた例もあった。

日本山岳会が十周年（一九一五）を迎えたとき、ヨーロッパの例にならって、ガイドに公認手帳を交付する案をたてたが、時機尚早で実現しなかった。

それがともかく一応ガイドとしての意識をもった組合をつくるようになったのは、大正六年（一九一七）の夏からで、対山館の百瀬慎太郎の努力によってできた大町登山案内組合というのがそれである。**伝刀林蔵**以下二十名ばかりが組合員であったが、その心得として、「案内者強力は純朴にして善良なる山人の気分を重んじ」とか、「出来得る限り親切丁寧を旨とし」とか、「争い口論等起こさざること」とか、「規定の賃金以上の暴利を貪らざること」とかがあげられている。もって当時のガイドがどんなものであったかがわかる。

槍の登山口は、最初は有明が主だったので、ここにもガイドが生まれ、**横沢類蔵**、**畠山善作**、**中山彦一**などが名をとどめている。燕岳の高瀬側にある団衛谷は、有明の猟師、**畠山団衛**の名をとったものだが、ガイドとしての活躍はなかったらしい。黒部の平にいた**遠山品右衛門**は、上高地の嘉門治とよくならべられるが、本名は里吉と言ったらしい。仲の**作十郎**や**兵三郎**は、山の案内もしたが、品衛門は岩魚を釣っていただけでガイドはしなかったらしい。

牧の**小林喜作**は、学習院と早稲田の北鎌尾根初登ハン争いに顔を出すが、やはり猟が本職だったようである。

立山の麓の芦峅には、佐伯や志鷹の一族が立山登拝の案内をしていたが、アルピニズム勃興時代のガイドとしては、劔岳の平蔵谷に名をとどめている**佐伯平蔵**がある。長次郎谷の**宇治長次郎**は大山村であり、また薬師岳に金作谷の名を残している**宮本金作**も芦峅ではなかったらしい。―源次郎尾根の源次郎は片貝の平沢にいた**沢崎源次郎**説と、芦峅の**佐伯源次郎**説があるが、後者の方が一般に知られている。

芦峅の人びとが、宗教登山の案内から目覚めて、全面的にアルピニズムへのりだしたのは昭和になってからのように思うが、五年一月の剣沢で**佐伯福松**、**同兵治**を失なって以来**宗作**、**栄作**、**亀蔵**、**八郎**など、アクシデントの犠牲となった人びとも多い。

小槍の初登ハン者とされている有明の**中山彦一**が、**高橋益司**とともに、常念で雪崩のために死んだのは昭和七年の三月であるが、このときは仲間の**塚田清治**らの遭難救援に向ったときのことである。

有明には、昭和十四年九月、谷川岳の一ノ倉滝沢を初登ハンした**浅川勇夫**がいたが、ガイドという職業にあこがれ、家族の反対を押しきって案内人の資格をとるための試験をうけたという。ガイドにもこういう人物があらわれるような気運が起ったのは、やはり昭和十年ごろである。

これで規定の枚数に達してしまったので、ペンをおかなければならない。南アルプスでは鹿塩の**宮下筆五郎**、上越国境では土樽の**剣持政吉**、秩父では広瀬の**雨宮馬吉**など、面識のある人びとにふれることができなかったのは残念である。（昭和三十八年四月脱稿、「岳人」編集部）

編集部註。本稿はかって本館が出版を企画し、その後中止となった「山の博物誌」のために執筆されたものである。今回、筆者の許しを得て、本紙に掲載させていただいた。

対山館を出る登山者と案内人（昭和初年）

遠山品衛門

小林喜作

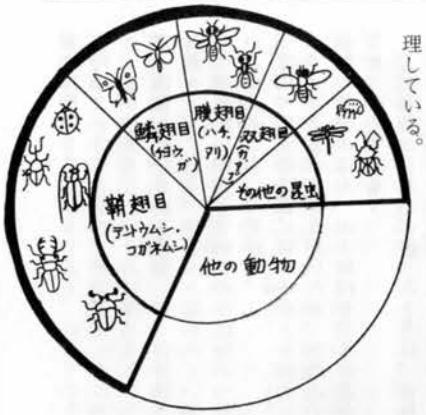
登山道の昆虫 (1)

輿水太仲

◎どのくらいの昆虫が棲んでいるか

現在地球上に生活する動物の種類は、九十一万六千～百十一万五千種と考えられているが、この七〇～八〇％に当る六十四万～九十万種は昆虫であろうと推定されている。全世界から、日毎に新種を発表し、発表されてもそれはすでに発表済みのものであったりしているので、なかなか正確な種類数はつかみ得ないのであるが、何れにしても、生物界において昆虫は、漠大な数をもって今日地球上に生活を営んでいるのである。

昆虫のうちで最も種類の多いものは、カブトムシやコガネムシ等の属する鞘翅類（しょうしるい）ー甲虫類とも言うーで全昆虫の約三分の一を占める大世帯である。次にチョウやガの属する鱗翅類、ハチ、アリの属する膜翅類、ハエ、カの属する双翅類と言う順になっている。分類学ではこれらを二十四のグループとし〇〇目（もく）と呼び、更にこの目を亜目（あもく）そして科（か）と言うようにし、全ての昆虫をそのどれかに属させて整理している。

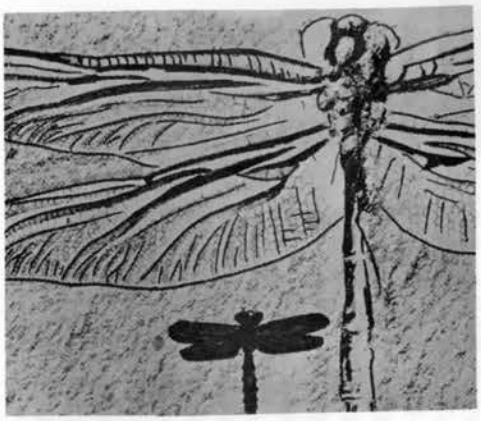


全動物の種類数のうち昆虫の占める割合

日本に棲んでいる昆虫のうち、蝶や蜻蛉は比較的調査研究が進められており、ほぼ正確な種類数がわかっている。その他の昆虫も部分的にはわかって来ているが、全体に正確な数を決めるまでには程遠いのが現状で、日本アルプス山系に分布生棲する昆虫も、無論、これからぽつぽつと数えられていこうとしているのが実状である。

◎なぜこんなに多くの昆虫がいるか

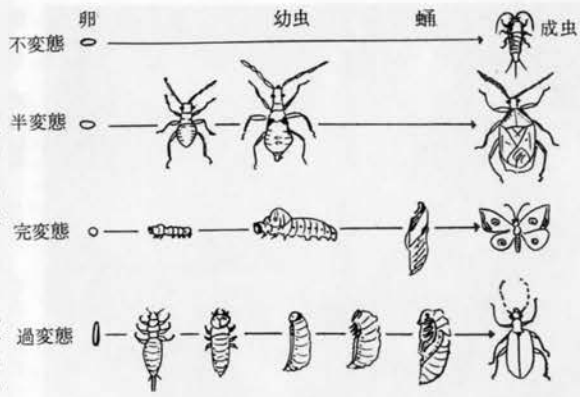
遠く化石時代には、翅長七十四㌢に及ぶトンボの如く巨大な昆虫もいたようであるが、現在では、ほとんどが他の動物に比べ小さいものが多く、だから棲む場所も狭く、食物も少なくてよい、更に体がキチン質と言われる割合かたい骨格でおおわれ丈夫に出来ており筋肉がよく発達し運動が自由で、生活場所は所を選ばず、地球上のいたる所を棲み家としその上増え方がおびただしい数である。



化石のトンボ

アメリカの学者の計算によると一対のハエから生まれる卵が完全に親になり、順次くり返して春から秋になる間その総数は百十九の後に〇が十八ついた数になると言う。又卵から親になるまでの間で〝変態〟ー体の形を変えるーと言う特殊な生育過程を持っている等々が原因で、今日かくの如く昆虫が大世帯になったものと考えられている。

このように多種の昆虫が、野に山に、水中に石下に朽木の中からキノコの中、はては糞の中までと自然の中では、ありとあらゆる場所で生活しているのであるが、特に昆虫の研究をする者や興味を持つ者以外は、山に登ってもあまり目にふれるものではないが、冬山を除くシーズンには、ちょっと注意すると案外多くの昆虫に会い、あえぎあえぎ登る山の息も軽く、それらを手にして見るうちに、登山の味わいを更に深く広いものにするであろうことと思って、多くの中から二・三の昆虫をピクアップして記してみる。



昆虫の変態のいろいろ

◎ツチハンミョウ

山路の木々が、芽ぐむ頃になると、土手や日当りの良い草原に雑草の芽が小さな筍の様に芽生え出る。そんな比較的砂質の地に、ツチハンミョウが現れ、新芽をむさぼり食う。

甲虫とは一般に体はかたいのであるが、この虫は軟弱で型は一見蟻の王様のようで、つまむと、馬鈴薯につくテントウムシのような黄色の液ーカンタリジンで薬用になるーを出す。燕尾服に似た鞘翅、体の大部分を占める程に太った腹、美しいつやのある紺色、虫の紳士とでも言いたいかっこうで、後翅はなく歩きが専門の運動をし、のろい。この虫は、晩春から夏にかけて砂中に黄色の卵を産むが幼虫はミツバチ等の訪れる花上で蜂の来訪を待ち蜜を探している蜂の脚に敏速につかまり空中旅行をし蜂の巣に運ばれ、ある期間ここで蜜を食べて居候生活をし成育する、いわゆる寄生生活をする甲虫として有名である。

日本には十種程の種類がいるが、アルプス山系では一千㍍附近までに棲み、あまり多くない昆虫である。（小諸市立美南丘小学校）

ツチハンミョウ

編集部註　本稿は「山の博物誌」出版の企画に基き、昭和三十八年三月に執筆されたものである。

山と博物館第17巻第8号
一九七二年八月二十五日発行
発行所　長野県大町市TEL②〇二一一　大町山岳博物館
印刷所　大町市下仲町　大糸タイムス印刷部
定価　年額四〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野一二三、一九三）